

2017.9  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やま 富 薬

9号

第39巻  
No.338



ヒガンバナ *Lycoris radiata* Herb. (ヒガンバナ科 *Amaryllidaceae*)

## 生薬

セキサン（石蒜）葉が枯れた晩春から初夏にかけて鱗茎を掘り取り、ひげ根を除去し、水洗して外皮を剥ぎ、陽乾する。生で使う場合は随時掘り取り、すりおろして患部に貼る。

## 成分

アルカロイド：lycorine, lycorenine, lycoramine, gal antamine, tazettine、デンプン、多糖類：glucoman, glucofructan。

## 効能

去痰、解毒、催吐剤として用いられたことがあるが、毒性が強いため外用のみで使う。肩こり、浮腫に鱗茎をすりおろし、両足の土踏まずに貼る。同じくすりおろしたものを乳腺炎、腫れ物、いんきん、たむしなどの患部に貼る。



生薬 セキサン

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



中国の揚子江流域の西南地区に多く自生し、日本では岩手県、秋田県以南の本州、四国、九州、沖縄の田の畦や墓地、堤防など人里近くに群生する植物です。日本のヒガンバナは3倍体で結実することではなく、もっぱら鱗茎の分球によって繁殖します。中国には揚子江流域に同じ3倍体があることや、やや小型で早く咲き、種子繁殖できる2倍体 (*var. pumila hort.*) があることから、日本には中国大陸と陸続きであった頃から広域に分布していたという説や縄文時代に大陸から持ち込まれた、稲作の伝来とともに持ち込まれた、海流によって運ばれた漂着植物であったなど多くの説があり、未だに謎のままになっています。

秋のお彼岸の時期に30-50cmになる花茎を伸ばし、鮮赤色の花を5-7個輪状に咲かせます。花被片は細く縁が波打ち、外側に反り返ります。花が終わると中央に灰緑色の線が入った濃緑色で線形の葉を出し、翌年の5月には枯れます。秋に花茎をあげるまで地上部が無いことからステゴノハナ（筑前）、ハミズハナミズ（加州）、ワスレグサ（仙台）などの里呼び名があります。鱗茎は広卵形で黒い外皮に覆われ、分球する力が強く、各地で群生しています。

古くに渡来し、目立つ花を咲かし、多くの里呼び名がある植物であるのに江戸時代になるまで記録があまりないのは、江戸時代初期の『多識編』（1612）に「石蒜 案に之尔比土乃波奈」とあり、『花壇地錦抄』（1695）の草花夏之部に「曼朱沙花 花色朱のごとく。花の時分、葉はなし。この花何成ゆえにや世俗うるさき名をつけて花壇などには大方うえず」と記されるように、あまり好まれなかった植物であったためとも考えられます。『和漢三才』（1713）には「山野、墳墓の辺りに多くあるところから俗に死人花という。人家、これを忌て種えるもの非ざるなり」とあまり人家に植えられなかった理由が述べられ、また「秋分に盛んに開く故、名を彼岸花という」、「法華経に曰く、まかまんたらげ魔訶曼陀羅華、まんじゆしやげ曼殊沙華、即ち曼陀羅花は今の朝鮮牽牛花 (*Datura metel*) 也、曼殊沙花は石蒜也」と記され、現在の呼び名のヒガンバナとマンジュシャゲの由来を説明しています。また『本草綱目啓蒙』にはショウキズイセン (*L. traubii*) とヒガンバナの自然交配種といわれるシロバナマンジュシャゲ (*L. albiflora*)、初秋に鮮黄色の花を咲かせ、日本に自生している金燈花 (ショウキズイセン?)、更に夏に橙赤色の花を咲かせるキツネノカミソリ (*L. sanguinea*)、次いで中国原産で夏に大形で淡桃色の花を開くナツズイセン (*L. squamigera*) の、いずれも葉と花茎を別々に出す *Lycoris* の植物5種を記しています。因みに属学名の *Lycoris* はギリシア神話の美しい海の妖精「リコリス」に、種名の *radiata* は「放射状の」の意で花の咲き方によると言われています。

中国の本草書における石蒜の登場は意外と遅く、『図経本草』（1058）に「水麻は鼎州、黔州に生じ、その根を石蒜と名づける。腫毒に傳貼する。九月に採取する」とあるのが初出です。『大観本草』（1108）には鼎州錦燈と黔州石蒜の図が載っています。李時珍（1518-1593）は「蒜とは根の形状から名づけたもの、箭とは形状から名づけたものだ」と名前の由来を記し、「これは小毒あるものだ。『救荒本草』（1406）に、ゆがいて水に浸せば食えるとあるが、それは救荒の場合に限ることだ」と書き、毒を洗い流して食べられることも記しています。日本でも毒成分を洗い流して食したり、臼で搗き水に晒して沈殿するデンプンを取ったと言われ、ドクスミラ（肥前）やヘソビ（へそび団子、伊勢）の里呼び名として残っています。（村上守一 記）